

EZproxy[®] Analytics



電子リソース利用経路の追跡 – マンチェスター大学におけるEZproxy Analyticsの試験的利用について

EZproxy Analyticsの試験段階が終了し、マンチェスター大学図書館のスタッフはその可能性に夢中になっています。これまで図書館が行ってきたものよりもきめ細かい分析を提供し、今後も予定されている機能追加によって進化し続けるからです。



MANCHESTER
1824

The University of Manchester

電子リソースの費用対効果は？

FTEで40,000人以上の学生がいるマンチェスター大学は、英国で2番目に大きい高等教育機関です。学生や研究者を支援するため、図書館は英国で最大の学術デジタルコレクションを所蔵しており、38,000を超える有料のシリアルタイトル（ジャーナル、定期刊行物、年鑑、新聞、会議議事録を含む）、584のデータベース、700,000冊以上の電子書籍がその内訳です。

このコレクションの管理には膨大な労力を要します。図書館は、電子ジャーナルの包括的契約であるビッグディールーこれは、利用量で大きな割合を占める電子リソースの大きなパッケージですーでの主要交渉者としてJisc（英国情報システム合同委員会）を使用しています。また、世界中の学会や小規模なコンテンツプロバイダーが提供し、コレクション全体の8分の1を占めている、個々の利用数こそ少ないが、需要はあるジャーナルの取引では、契約エージェントも利用しています。電子リソースへのアクセスに関しては、ブラウザプラグインやその他のツールを使用して、学生や教員がコンテンツを発見するGoogle Scholarなどのような主流のサイトから自館のコレクションに利用者をリダイレクトすることが増えています。これら全ての事が、利用状況の断片化を引き起こし、全体像を見えなくしています。図書館のスタッフは、さまざまな情報源を調査して、図書館のデジタルリソースへの莫大な投資が効果に対して適当なものかどうかを立証しようとしています。

マンチェスター大学は、EZproxy Analyticsの試験的利用に参加する事に同意しました。複数の情報源から基本的な統計を手動で取得する必要がなく、1か所で詳細な利用状況レポートにアクセスするチャンスだと捉えたからです。以下で概要をご紹介します。要望は、EZproxy Analytics本番リリースの機能の一部にてすでに利用可能な統計機能だけでなく、今後追加される機能も含んでいます。

ポイント

電子リソースの価値を評価するには、より強力なエビデンスが必要です。EZproxy Analyticsを使用することにより：

- コンテンツプラットフォーム、リソースタイプ、および一部のコンテンツプラットフォームのコレクションごとに、豊富なデータを使用してコレクションの使用状況を包括的に把握します。
- COUNTERレポートに基づいて、利用ごとのコストのより詳細な一覧など、データのギャップを補完します。
- 特定ユーザーの利用数をお知らせします。

EZproxy[®] Analytics

Makes it easier to better understand and communicate e-resource ROI.

電子リソースの価値を 評価する: 電子リソース 契約担当部長に聞く

「電子リソース契約担当部長としての私の役割は、コンテンツプロバイダーの最初の連絡先として機能する事です。」とジャスティン・パーカーは述べています。「私のチームは、大学が電子リソースへの投資について最善の取引を得られるようにする責任があります。」

コスト圧力が高まっている現在、この事はこれまで以上に重要です。チームは図書館が厳しい選択に直面するときが来ることを予見しています。「比較的手頃なリソースでさえ、契約更新のためには、費用に見合った利用をされていることが求められます」とジャスティンは付け加えました。

利用数の実態

更新時に適切な取引を行うには、強力なエビデンスが必要です。現在利用可能な基本統計を用いてこれを行うのは特に困難な事です。ジャスティンのチームは、「役に立たない利用数」つまりエビデンスに基づく決定を行うために必要な利用者プロファイルなどの背景情報を含まない、単純なダウンロード数による指標について、こう言及しています。小規模なコンテンツプロバイダーからのリソースには問題があり、大規模なパッケージとタイトルの場合、図書館は少なくともCOUNTERレポートとSUSHIハーベスティングによる基本統計に頼る事ができます。

また、彼のチームはパッケージ自体の内容も監視します。「突然、パッケージ内で特定のタイトルが利用できなくなったことに気付くのです。」とジャスティンは語りました。「それはいつでも起こります。私たちはまだその代金を払っていて、利用者がアクセスできなくなるまで気づきません。」EZproxy Analyticsの試験的利用中、図書館スタッフは利用不可時間を把握できるという理由でベンダーダウンタイムレポートがこの種の事態でもたらす有用性を強調しました。ベンダーダウンタイムレポートは、今後のリリースで利用可能になる予定です。



**EZproxy Analytics is a turnkey
analytics service that transforms
data into actionable insights.**



COUNTERなど現在の利用状況データの主な欠点は、リソースの利用者に関する情報がほとんど提供されないため、リソース価値についての理解が制限される事です。例えば、利用率の低いあるパッケージは、その利用が、小規模な学生グループであっても、それを特定できることで、ある領域において高い価値があるといえるかもしれません。また、2年生の数学履修者群など、1つの利用者グループがニーズを考慮して購入したリソースを、彼らが使用していない場合、図書館はそのリソースの利用拡大に焦点を絞ったり、図書リストを通じて教員がそのリソースに誘導しているかどうか確認したりできます。

EZproxy Analyticsの試験的利用により、図書館は既存のCOUNTERデータをどれだけ補完できるかを知り、また、利用者データと組み合わせる事によって、電子リソースの利用状況の詳細かつ最新のデータを得ることができると実感しました。スタッフは、COUNTERの利用状況データが月次ベースでのみ提供されるのに対し、EZproxy Analyticsからの提供データには翌日にアクセスできる事を喜んでしています。

オープンアクセスコストの予測

多くの司書と同様、ジャスティンは、利用者がジャーナル記事を読むために大学が支払いを続けながら、同じ記事に対して出版料を支払うという新興のオープンアクセス界における「ダブルディッピング」を懸念しています。当大学の明確な課題のひとつは、ヨーロッパのすべての研究出版物を無料で利用できるようにすることを目的とする、欧州Plan Sオープンアクセスイニシアチブです。

次年度に向けた主要な優先事項は、図書館の電子リソース予算の大部分を占めているビッグディール(包括的パッケージ契約)を評価して、必要なエビデンスを集める事です。ジャスティンは、大学のサブスクリプションのコストが毎年3~4%も増加し続けていることを認識しており、オープンアクセス資料の割合が増加してもコストが下がらないことを疑問視しています。これに対処するために、図書館はパッケージ内のオープンアクセスリソースの割合の変化を追跡し、これを利用してコンテンツプロバイダーと交渉します。

ジャーナルパッケージの利用者層を理解することも重要ですが、これは、図書館がCOUNTERレポートのみに依存しなければならなかったため、これまでは困難なことでした。彼らは、EZproxy Analyticsで利用ごとのコストのより詳細な一覧を取得し、ローカル認証システムからEZproxyに利用者の属性情報を取り入れる事により、COUNTERレポートを補完する事ができます。

電子リソース契約担当部長は、状況が変化し、全体的なコストが上昇し続ける中で、オープンアクセスとライセンスコンテンツの使用を正確に比較できることを熱望しています。EZproxy Analyticsでは、オープンアクセスとライセンス電子コンテンツの両方がプロキシされている場合に、この比較を行う事ができます。





メタデータ改善による利用数の増加

外部から提供されたメタデータの品質が資料の発見と利用に悪影響を及ぼしているのではないかと懸念から、図書館はデジタルコレクションのメタデータ担当者を選任しました。図書館スタッフはその時初めて問題の全容を把握しました。ある契約において、フォーマットが多岐にわたるにも関わらず、メタデータでは全てのタイトルを「図書」として分類していたため、大学はその契約を解除することになりました。また、コンテンツプロバイダーから購入したあるレコードセットの中には、個々のタイトルの目録が取られていなかったため、図書館スタッフが500冊もの初期アメリカ史に関する電子書籍を見つけるまで、それらを誰も見つけることができない状態となっていました。これらのメタデータの改善が完了し、コンテンツがより見つけやすくなると、図書館は利用数の増加を期待します。スタッフは、利用者データとEZproxy Analyticsを併用して、さらなる改善が必要なコレクションを特定する予定です。

利用促進活動の効果を評価

機関内に新しい電子リソースの契約を周知させるのには時間がかかることがあり、最初はほとんどの研究者がそれを認識しておらず、図書リストへの登録が少ない場合があります。図書館は、EZproxy Analyticsをその利用促進活動の効果を評価するための有用なツールと見なしています。新しいリソースが購入されると、スタッフはすぐに利用促進キャンペーンを実行したのち、その効果を分析できます。そのリソースの利用が軌道に乗ってからは、ローカルユーザーデータが組み合わされたEZproxy Analyticsによって、より長い期間の利用状況が確認でき、時間の経過に伴うそのすべての効果を定量化できるため、今後のキャンペーン展開にも役立てることが出来ます。



電子リソースへのアクセス支援： 電子リソースコーディネーターに聞く

「電子リソースコーディネーターとしての私の主な職務は、スタッフと学生が大学で購読しているデジタルライブラリのコンテンツにアクセスするのを手助けする事です。」とティム・オニールは話します。

ティムのチームは、利用者サービスと電子リソースアクセスへのアプローチにおいて革新的です。彼らの課題はその仕事の価値を実証することであり、EZproxy Analyticsを使用してこれを達成し、さらに改善することを計画しています。

利用分析に基づく図書館サービスの改善

ティムは、必要なコンテンツへのアクセスに苦労している学生や学者からの電話を受けるユーザーヘルプデスクを運営しています。ティムのチームは的を絞ったサポートを提供します。適切なサポートが整っていれば、必要なリソースにアクセスしようとしてイライラする利用者が少なくなり、ヘルプデスクへの問い合わせも少なくなります。

図書館は、EZproxy Analyticsをユーザー・エクスペリエンスに対する重要な洞察の源と見なしています。このツールは、あるユーザーグループによる使用が見込まれているのに使用していない電子リソースなど、アクセスにおける重大な見落としを明らかにするのに役立ちます。また、人気のプラットフォームを特定するなど、ユーザーの好みを測るのにも役立ちます。また、モバイルアクセスの明確な状況を図書館に提供し、あらゆるデバイスから利用できるレスポンスサービスの事例を補強し、ライブラリアプリの開発に情報を提供します。

EZproxy Analytics allows you to view usage by various time stamps, such as hour, day, and month. This information can help identify spikes in usage to provide user support when it's most needed.

EZproxy Analyticsを使用することで、時間の経過に伴う利用者行動傾向の可視性が高まり、図書館は、より積極的にサービスを提供することができます。スタッフが通常の学習時間外に利用量の急増を発見した場合（たとえば、早朝に調査をしている人々など）、その時間帯にサポートを提供することは理に適っています。EZproxy Analyticsを使用して利用の混雑時間を特定することで、図書館のヘルプデスクの稼働時間と人員配置を見直すこともできます。



情報セキュリティの管理

電子リソースのセキュリティ上の事故は深刻な懸念材料です。ベンダーがセキュリティの脅威に対応してサブスクリプションを遮断するという脅威は、決して仮定的なシナリオではありません。これは、評判を損なう可能性がある非常に現実的なリスクです。マンチェスター大学図書館は、EZproxy Analyticsをこのリスクを軽減できるツールと見なしています。ベンダーが図書館に連絡して、大学のIPアドレスの1つからの不審な操作を告知した場合（1つのユーザーアカウントが1つのデータベースからの非常に短時間での数千ファイルのダウンロードに関係しているなど）、アクセスが完全にブロックされる可能性があります。原因調査の負担は図書館にかかります。

また、これは現在、後手に回った対応ですが、図書館スタッフは、事故についてコンテンツプロバイダーから最大2日間通知を受けられない場合があります。この潜在的な遅延は悩みの種であり、図書館はより積極的かつタイムリーなアプローチを取ろうとしています。EZproxy Analyticsは、図書館が利用状況データに基づいて行動する事をはるかに容易にします。このサービスにより、EZproxyログファイルを分析する場合よりずっと簡単にデータにアクセスして状況を把握できます。

EZproxy Analytics automatically ingests EZproxy audit logs, allowing access to security event information quickly and easily. Security events include actions like successful user log-ins, password attempts, and session expirations.

チームは試験的利用中にEZproxy Analyticsの複数地域のレポートを注意深く調べました。これは、一つのアカウントが、世界各地から同時にリソースにアクセスしていることを特定するのに役立ちました。この事は、あるアカウントが侵害されており、すぐにシャットダウンされる必要があることを強く示しています。

グローバルな効果の実証

大学にはドバイ、香港、上海、シンガポールに4つの海外センターがあります。ここでは、対面式とデジタル式の活動を組み合わせることでMBAの学生の学習を支援する、幅広いオンラインおよび混合学習プログラムを提供しています。図書館は、EZproxy Analyticsをマッピングツールにリンクして、そのグローバルな効果を視覚化することを計画しています。チームによれば「海外センターのあるアジアのような地域における図書館の影響力を明示することで、これは大きなビジネス的価値を持つでしょう。」ということです。



EZproxy Analytics利用で未来に 目を向ける

EZproxy Analyticsの試験段階が終了し、マンチェスター大学図書館のスタッフはその可能性に夢中になっています。これまで図書館が行ってきたものよりもきめ細かい分析を提供し、今後も予定されている機能追加によって進化し続けるからです。

図書館システムを超えた利用量の分析

図書館は、利用者がどこにいても図書館資料へのアクセスを提供するという精神で、PubMed、Wikipedia、Google Scholarなど主流のWebサイトから発見の旅を始めるツールとサービスを導入しています。これを念頭に置いて、Third IronのLibKey NomadとLean Libraryのブラウザ拡張の2つのツールをリリースしました。どちらも、図書館のライセンス取得済みデジタルコンテンツへのアクセスを容易にし、図書館のディスカバリーツールから検索を開始する必要はありません。図書館のディスカバリーシステムから詳細な電子リソース分析を取得することは既に充分困難ですが、これらのサードパーティサービスを導入することで新たな困難が加わります。図書館は、電子リソースの利用統計自体が正確であることを確認することに加えて、これらのツールが利用者を満足させる上でどれほど効果的であるかを評価したいと考えています。

アラート機能とセキュリティ

侵害されたユーザーアカウントは、多数のダウンロードまたは短期間の複数の場所からのアクセスのいずれかから明らかとなります。これは、図書館が対応するためのトリガーです。EZproxy Analyticsにて今後リリースされるアラート機能を導入することで、セキュリティ担当スタッフは、転送されたデータの量、複数の地域からのログイン、失敗したログイン試行などのトリガー通知を受け取ることができます。これらのアラートにより、スタッフは、コンテンツプロバイダーが教育機関全体のアクセスをブロックするリスクを軽減するために即座に行動を起こすことができます。

電子リソースデータ価値の拡大

デジタルライブラリアプリケーション開発部長のイアン・ギフォードは、EZproxy Analyticsをライブラリデータセット全体への重要な追加機能と見なしています。「電子リソースデータは伝統的に金粉のようなものでした—入手するのは困難ですが、非常に貴重です。」「簡単にアクセスできる方法で表示し、他のデータセットとリンクする必要があります。」

図書館はEZproxy Analyticsが提供する魅力的なインターフェースに好印象を受けていますが、同時にイアンのチームは、将来のリリースでAPIを介してリアルタイムのEZproxy Analyticsデータにアクセスし、その完全なビジネス価値を実現することを熱望しています。APIを使用してEZproxy Analyticsを他のソースと統合すると、電子リソースの利用状況データの価値が変わり、電子リソースが利用者に及ぼす影響と図書館全体で何が起きているかをより完全に把握できます。

“E-resource data has traditionally been like gold dust—hard to get hold of, but extremely valuable. We need to present it in easily accessible ways and link it up with other datasets.”

Ian Gifford
Digital Library Applications
Development Manager
University of Manchester Library



必要性、価値、機会の証明

EZproxy Analyticsの試験的利用により、マンチェスター大学図書館は、短期的および長期的な目標の両方を達成するにあたってのEZproxy Analyticsの価値を見定めるとい、優位な立場にありました。図書館スタッフは、すぐに使えるダッシュボードとカスタムクエリの価値を認識し、躊躇することなくEZproxy Analyticsの本導入を決めました。

試験的利用を率いたチームは、次のように結論しています。「OCLC EZproxy Analyticsは私たちにとって優先事項であり、来年はその可能性を最大限に活用することを目指しています。それは私たちの電子リソースの価値だけでなく、利用者行動や傾向に関する強力なインテリジェンスを私たちに与える事を保証しています。情報セキュリティの強化はもう1つの重要な検討事項であり、また、図書館だけでなく大学全体にとっても、オープンアクセスの影響を追跡する事は極めて重要です。」

“OCLC EZproxy Analytics is a priority for us, and we’re looking to exploit its full potential over the coming year.”

Tim O’Neill
Electronic Resources Co-ordinator
University of Manchester Library

Visit oc.lc/ezp-analytics to learn more.

Because what is known must be shared.®

